
『物流 Weekly』連載原稿

『日本ロジファクトリーの物流ケース・スタディー』

“社長！それは違います！” 第106回

<タイトル>

「出荷検品の精度を高めるために」

<本文>

庫内作業の改善については今回で一旦、最終回となる。

今回は、各現場で頭を痛めておられるであろう「出荷検品」について述べていきたい。

出荷検品に力を入れるとなると、その精度とスピードを上げることになるが、

「検品」作業においては、特に精度が肝要となる。

多くの現場はダブルチェックを行っているが、その内容についても

誰が行ったかがわかるよう、チェック担当者のサインが記されているか

二回目のチェックは同一人物ではなく別の者が行っているか

少数で作業を行う場合が多い中、1回目のチェック者がそれぞれ入れ替わり、

2回目のチェックを行う襷掛け型チェックを行っているか

をまず確認していただきたい。

現場では、生命に関わる商品や輸出品などである場合は

トリプルチェックを行うこともあるが、基本的にはダブルチェックで十分である。

重要なのは から のようなチェックの中身である。

そして、最も重要な点がある。

一般的に現場での検品は「外」に間違っただ商品、

荷物を出さないという点に重点を置くが、さらに抜本的な解決として、

チェック担当者の段階で食い止めることができた、

または発見することができた「誤出荷予備軍」について、

なぜ間違っただ商品・荷物がチェック担当者に届いたかという原因を突き止めること。

出荷検品は間違っただモノが「外」に出なければOK！ではない。

「なぜ間違っただモノが出荷されようとしたのか」という庫内での理由を

掌握することに大きなポイントがある。

これらをチェック担当者にピックアップしてもらい、管理者に原因を究明してもらおう。

また、その「誤出荷予備軍」の履歴と原因をしっかりと文書やデータに残し、

常に朝礼や昼礼・ミーティングなどで注意し、徹底させる。

これにより問題点を共有化させ、意識づけるのである。

なお、ここでも注意点がある。

「誤出荷予備軍」の原因究明を後で行う現場も多いが、

これは全く意味を成さない。

事故検証と同じで、時間が経てば作業環境が変わり、結果的に原因が分からなくなる。
クレームやミスの改善は、その場で即時原因究明にあたるという
「鮮度」が最も大切である。